

自然をより身近に感じるために

(1) 理科の対象は「自然の事物・現象」

春、低学年から中学年の仲間入りをした3年生にとって、理科や社会科との出会いも新しいものである。希望に満ちた子どもたちにとって、その出会いも大切にしたいと感じている。理科は教科の目標にもあるように、対象は「自然の事物・現象」である。できる限り、教材は本物を基本としたい。3年生理科教科書（東京書籍）の始めは「春のしぜんにとびだそう」である。安全面へ配慮をしながらも、外の空気にふれながら身近な自然を体全体で感じさせたいのである。

(2) 身近な自然を細部にわたって観察するために

本内容の学習においては、観察器具として「虫めがね」を大いに活用させたいところである。虫めがねは3年生の子どもたちにとっても、魅力的な道具のようである。虫めがねの使い方については、観察する対象が〔手で持てる物〕と〔手で持てない物〕とでは使い方が異なることについて、子どもたちが区別して使うことができるように、ぜひしっかりと押さえないといけない内容である。ちなみに、この内容は平成24年度に実施された全国学力・学習状況調査においても出題された内容でもある。

観察する対象が〔手で持てない物〕の時は、ピントを合わせるために、虫めがねそのものを動かすのが自然である。そのことに対し、観察する対象が〔手で持てる物〕の時の技能がなかなか身につかないことが多いのである。そこで、継続して観察をしながら、虫めがねの使い方の技能を高めることができるように、採集した植物をペットボトルに入れて、教室に置くことができるようにした（写真1）。



写真1

本実践の時に子どもたちに持たせた観察の視点は「花の形」である。4月の飯坂小学校の校庭には「ホトケノザ」「ノボロギク」「オオイヌノフグリ」「ヒメオドリコソウ」などがたくさん咲いている。どれも身近にある植物だからこそ、子どもたちにじっくり観察させたいという思いがあった。ペットボトルに入れただけでも、10日くらいは状態を維持することができるようである。この季節の時には、それほど高い気温にならないことが功を奏しているようである。ノボロギクをしばらく教室に置いていたところ綿毛をつけ、種子ができていく様子を見ることもできた。子どもたちは、その変化のたびに虫めがねを使用していたので、身近な自然への関心が高まったと同時に、虫めがねの使い方をしっかりと習得することができたのである。

理科の対象は自然である。常に実物に触れさせることを通して、自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図っていきたいのである。



（所属：飯坂小学校 紺野 稔）